

我如古の化け猫

梗概

あのね、もう昔になるんだよねえ。猫が人に化けて、もう家庭をもって、子どもも二人、姉と弟を産んだ。そして、夫は毎日畑に行くんだけど、この猫は、夫が行くと、女だけ大猫になって、天井の鼠がさわいだら、すぐにもう、化けていたのが元にもどるわけね。それで、子どもが、「ねえお父さん、私たちのお母さんは、鼠がピーピーと泣いたら、鼠を取って食べるって猫になるよ。本当だよ。」とこの子がいうので、そのお父さんは、「まさか。」と思って、「ばかたれ、ばかなことをいって。」といった。(妻は)毎日、また仕事もしないで、布ばかりおっていたらしいとか。機からおりて、鼠を取ってどうしようもないというので、「本当かなあ。もうこの子がああいうので。」とあって、畑に行くふりをして隠れていた。すると、何時頃元にもどったとあったのか、案の定大猫になって、鼠を取ってワーワーとしたので、「もう大変だ、私は猫と夫婦だったんだね。」とあって、その時から驚いて、畑に行ってきた、また、夕飯も食べてから、一息ついて、「おまえは、もう子どもを二人産む間、おまえの親に会ってないでしょう。その子どもたちもそうだから、親に会いに行っておようね、おまえの親たちは何を召しあがるのか。」という、「私たちの親は魚を召しあがります。(ほかは)何も召しあがりませんよ。」とあって、すると「やっぱり、そうか、猫だなあ。」とあって、隣の物知りお爺の所へ走って行って聞いてみると、このお爺が、「もう魚は多く買わせて、お膳に入れてかつがせて、そしてそれを先にしなさい。おまえは十五間ばかり後になって、風上から行かないで、風下からおまえは歩きなさいよ。」と、隣の物知りが教えた。子どもたちは、どうしても二人連れて行くというが、「ああ一人はもう歩けないから、おまえたちの家は遠いのか。」と聞くと、「大変遠い。」とあったんだって。それで、それなら子どもは隣にあずけて、自分は下の子をおんぶして、妻はいつも十五間ばかり先にして、かつがせて行かせた。すると案の定、山奥の洞窟が親の家になっているわけね。そうすると、洞窟の入り口に行くと、この御馳走の魚をおろした。するともう猫になって、「マーワーワー。」という、夫婦、親猫たちが、「おまえはね、もう人間(しーじゃ)〈昔は人にしーじゃとあったそうだよ〉に殺されて、もういなくなったと思っていたのに。おまえはもう元気だったんだねえ。」とあって、二ひきのうすよごれた猫が出てきた。そして、それをなめまわすと、「私は、まだまだ殺されていないよ。人間と二人、子どもも産んでいるよ。」とあってね、「おまえ、それでも人間は物知りだから、もう帰らないで、おまえも、私と子どもたちとここにいなさい

ね。」という、「いいえ、私は、人間たち、子どもたちも連れてくるよ。もう魂を取って来るよ。」といったんだって。「そんなことはするな。人間は物知りだから、おまえはもう、遺言で亡くなるだけだ。『我如古（がにく）ナガサチン、ウーナチ猫（まやー）、ウーナチスナヨー〈我如古ナガサチン 大泣き猫よ 大泣きするなよ〉 北風（にしかじ）ヌ吹（ふ）チーネー、南（へー）ンカイタイハティティ〈北風が吹けば 南に向かって死になさい〉 南（へー）ヌ風（かじ）ヌ吹（ふ）チーネー、北（にし）ンカイタイハティリヨー〈南の風が吹けば 北に向かって死になさいよ〉』とって、それを一息で三回くり返したらね、おまえは北枕で死ぬからね、人間は物知りだから行くなよ。」と、親たちが行かせないという、「いいえ、夜には行って取ってくる。」といったんだって。それで、夫は風下でその話を聞いて、もうすぐ、いちもくさんに家まで走って行って、家は猫が入らないように、みんなこうして、釘を打って家に入れないようにした。猫が入れないようにくくって、家のまん中に、子どもを二人連れて行って座らせた。この猫は、もうまたとてもいやな泣き方をして入ってきたかとか。家のまん中に入ってくるとすぐ、それを三回くり返すともう泣かなくなった。夜が明けてきたので見ると、北枕をして死んでいたんだって。お母さんは亡くなってしまって、それは人間を子どもを産んだからといって、また人間と同じように葬ったという、その話は聞いたよ。

話者情報 1915（大正4）年生まれ 女性
記録日 1982年9月22日
分類 本格昔話